

ヘミングウェイと結婚と家庭(1) : 従属と自己破壊

中村, 嘉雄
九州大学大学院文学研究科 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6788264>

出版情報 : 九大英文学. 39, pp.169-193, 1996. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

ヘミングウェイと結婚と家庭（1）：従属と自己破壊

中村嘉雄

I

ヘミングウェイの「結婚」観や「家庭」観は、いかなるものなのだろうか。この問題は、大きすぎて捉え難いもののようにみえる。だが、ヘミングウェイの作品においてこの二つの観点を取り扱ったものの内部には、彼の共通する信念が流れているように思われる。

『ニック・アダムズ物語』(*The Nick Adams Stories*)に登場する主人公は、「結婚」に対して懐疑の念を抱いているように思われる。¹ その短編集中の作品、「身を横たえて」(“Now I Lay Me”)において、自分の抱く「結婚」に対する疑いをニックは、ほのめかしている。作品に登場するシカゴからきた当番兵は、三人の子持ちで、妻は店を経営している。彼は、その日も眠れぬ夜を過ごしていたニックにアドバイスをする。そのアドバイスとは、結婚することであった。眠れぬ原因を、悩み事があるためと解釈したその当番兵は、結婚すれば、悩みは全て解消されるというのである。

“A man ought to be married. You’ll never regret it. Every man ought to be married.”

“All right,” I [Nick] said. “Let’s try and sleep a while.”

“All right, Signor Tenente. I’ll try it again. But you remember what I said.”

“I’ll remember it,” I said. “Now let’s sleep a while, John.”

(152)

ニックの、「結婚すべき」というこの当番兵のアドバイスを全面的に受容する意思のなさは、しきりに眠ることを彼に勧めるニックの態度より見て取れる。実際に、このアドバイスに対して懐疑の念を抱いていることは、この当番兵が自分のもとを去ったことに安心しているニックの姿から理解できる。

I was glad he was not there, because he would have been a great worry to me. He came to the hospital in Milan to see me several months after and was very disappointed that I had not yet married, and I know he would feel very badly if he knew that, so far, I have never married. He was going back to America and he was very certain about marriage and knew it would fix up everything. (153)

彼が、当番兵の提案を受容することのできない理由には、両者間に存在する「結婚」の意義に対しての根本的相違が原因と思われる。「結婚」を、あらゆる憂苦の終焉と捉えていた当番兵とは違い、ニックにとって「結婚」とは、悩みの始まりを意味するものだからである。このように、ニックが、自らが結婚する以前に、「結婚」が憂苦の終焉であるか否かについて懐疑の念を抱く理由には、結婚して虐げられる父と、支配の喜びに浸る母の姿が、彼の記憶にあるからである。

この当番兵と彼との会話以前に、この作品はニックの回想場面を含んでいる。戦地に赴いているニックは、眠れぬ夜を、通常、過去に出会った人々を思い起こしながら、その一人一人に、『アヴェ・マリア』と『天にましますわれらの父よ』を唱えながら過ごしていた。そして、その日は、自分の両親を思い浮かべるのであったが、その思い出は、昔の良き平和な彼の少年時代ではなかった。

新しい家への移転の際に、ニックの母親は、その新居に移すにふさわしくない物を裏庭で焼却した。その焼却の対象となったのは、ニックの父が大切にしていた、石の手斧や、皮はぎ用の石のナイフや、矢尻、また、蛇などの標本をいれたアルコールの壺などであった。

“I’ve been cleaning out the basement, dear,” my mother said from the porch. She was standing there smiling, to meet him. My father looked at the fire and kicked at something. Then he leaned over and picked something out of the ashes. “Get a rake, Nick,” he said to me. . . . My father spread all the blackened, chipped stone implements on the paper and then wrapped them up. “The best arrowheads went to pieces,” he said. (147-148)

ニックの父の落胆振りや妻に対する怒りが、それらの感情の吐露なしに、火かき棒で、壊れた自分のコレクションを集めるという直接行動を介して読者に伝わってくる。この感情自体を言葉として書き出すことなく、行動を通じて読者にそれを感じ取らせるという文体が、ヘミングウェイの作家修行時代に目標とされたものであることはいままでもない。彼の目標は、“knowing truly what you really felt, rather than what you were supposed to feel, and had been taught to feel”であった。²そして、失敗を重ねながら、作家としての資質を磨き上げたわけだが、この行動を中心とした場面は、その中心である父が、いかに妻の仕打ちに怒りを覚え、それに耐えているかを読者に伝えることに成功している好例であると思われる。しかし、ここには、もうひとつの捉えるべき行動を介しての感情がある。母のそれである。夫の大切にしていたコレクションを臆面もなく焼却し、ちょうど夫にその場を目撃されたにもかかわらず、不敵な笑みを浮かべ夫に接する彼女の態度には、明らかに征服者の如き勝利の喜びが見て取れる。このエピソードだけで、この夫婦間の勢力関係や、夫が妻によって、いかに精神的に虐げられているかが理解できる。

ニックにとって、「結婚」とはこのように憂苦の終焉を意味するものではなく、その存続あるいは起因となるものなのである。ニックにとって、この支配と従属関係としての夫婦関係が、自己の結婚に対する懐疑の原因の一つになっていることは、彼の父と母が描写されているもう一つの作品からも理解できる。³

「医師とその妻」(“The Doctor and the Doctor’s Wife”)にも、同様に、支配的な妻と従属的な夫の姿が描かれている。家へ戻ったニックの父は、ディックと口論したことを妻に伝える。

“Henry,” his wife called. Then paused a moment. “Henry!”

“Yes,” the doctor said.

“You don’t say anything to Boulton to anger him, did you?”

“No,” said the doctor.

“What was the trouble about, dear?”

“Nothing much.”

“Tell me, Henry. Please don’t try and keep anything from me.

What was the trouble about?” (25)

上記の会話から推測可能な事柄は、いかに父が妻を目の前にして無力になるかということである。ディックとの口論でみせた感情の激しさは抑えられ、あたかも、母親に事の間緯を物語る子どものように成り果てている。

このように、支配する母と従属する父という関係が、ニックの「結婚」に対する懐疑の念の根底にあるものであるが、なぜニックは支配されること、あるいは従属することにこだわるのであろうか。その答えは、子どものように成り果てた父の姿にある。

Mark Spirka は、「医師とその妻」に登場するニックの母を、“the early modern mythology of castrating wives and mothers”の範疇に位置付け、そして、この「去勢」させる母が、自分の夫をいかに薄弱化するかに論及している。⁴

There too, in the same northern Michigan cottage, she rests in a room with drawn blinds while others are left to cope with harsh realities; but far from being helpless in her blind passivity, she unmans her cowardly husband by insisting on the validity of her benign Christian Science outlook over and against his

medical and pragmatic views.⁵

スピルカがここで注目する点は、何故ヘミングウェイが自分の母親を「クリスチャンセイエンス」の信奉者に仕立て上げたかであるが、ニックの、支配的な母や従属的な父への嫌悪感の原因を知る上で重要なことは、スピルカの言葉を借用すれば、“she unmans her cowardly husband”という点のように思われる。

では、父に「去勢」化を促す母が、何故問題となるのか。この問は、もはやニックの物語りのレベルでは、理解することは難しい。というのも、『ニック・アダムズ物語』では、父と母の登場する作品は、そのほとんどが父とニックの関係を扱っているものであり、母について言及している作品はごく少数であるからである。よって、この物語りの作者である、ヘミングウェイ自身と彼の家族に焦点をあて、この問題がいかに彼にとって回避することの出来ないものであるかを考えてみることにする。

II

ヘミングウェイにとって、この問題は、ニックの父に、または、自分自身の父へと自己を投影することから生じると思われる。換言すれば、自分も男性であるが故の問題なのである。しかし、この問題に触れる前に、ヘミングウェイが、支配的な母と支配される父を問題とする契機を歴史的な事実より考えてみたい。⁶

「身を横たえて」に描かれている父の姿。妻に自分のコレクションを焼却される父は、ヘミングウェイ自身の父、Clarence Edmonds Hemingway(以下エド“Ed”と記す。これは、彼の友人の間での呼称である。)が、幼少の頃よりインディアンの矢尻などを収集していたことや、ハンティングを好んでいたことから、彼の父親がモデルであることは容易に理解できる。しかし、彼の受けた侮辱が、本当に起こったものであるかは定かではない。⁷しかし、ヘミングウェイがこのような精神的に虐待される、あるいは、「去勢」される父の姿を幼年時代より見てきたことは予想される。

ヘミングウェイの父であるエドは、妻の Grace Hall Hemingway (以下グレースと記す。)とは、子どもの教育に関して考え方の相違があった。エドは、自分の娘や息子たちの教育に関しては、かなり厳格であったようである。James R. Mellow は、その厳格さを語っている。

Outside the family, Clarence Hemingway was considered a charmer. But with the children he could turn suddenly gruff or stern when they misbehaved or neglected to perform some chore. In serious cases, he took a razor strop to them. After punishment, they were told to kneel down and ask God for forgiveness. As they grew older they realized that their father made decisions only reluctantly and that if they asked permission to do something or go somewhere, his first answer was apt to be no. They soon learned that it was better to ask their mother first.⁸

エドのその教育方針は、かなり厳格なもので、子どもたちが、なにか誤った行いをすれば、皮の鞭で罰するほどであった。また、その後も、神に許しを請わせるなど、信仰心も厚かった。さらに、簡単に子どもたちの要求を受け入れようとはせず、子どもたちは、まず母親に許しを求めるのである。

この母に先に相談するということは、厳格な人間を父として持っている場合、子どもたちが、そのようにしてもなんら不思議なことではない。母親の許しを得たからと言い訳にもなるであろう。しかし、この子どもたちの習慣は、もう一つの隠された側面である夫婦間の勢力関係を示唆するもののように思われる。つまり、母が一家の決定権を握っているということである。母グレースが一家の決定権を掌握しているという推論を明確にするものとして、ダンスに関するエピソードを提示したいと思う。

厳格であった父エドは、飲酒、喫煙、ダンス、トランプ遊びなどに賛成ではなかった。自分の子どもたちにも、この信念を厳守させ、さらに日曜日には、あらゆる娯楽を禁止し、強制的に日曜学校へ通わせるほどであった。一

方、グレースはといえば、夫ほど躰に関して厳格ではなく、彼女は、むしろ子どもたちに人生を楽しんでもらいたいと思っていたようである。⁹そして、ヘミングウェイが、The Oak Park and River Forest Township High Schoolの一年生の時に問題が起こった。

ヘミングウェイは、この頃、生まれて初めてダンスの手ほどきを受けている。自分の通う学校で行われていたダンスパーティーに出席するためなのか、その理由は定かではないが、いままでダンスを経験したことのなかったヘミングウェイが、多少ともその必要性を感じたのは確かであろう。そこで、1914年10月17日には、姉の Marcelline と共にベル・イングラム嬢のダンス教室へ向かうわけだが、このダンスパーティーやダンス教室を、厳格な父はどのように思っていたのであろうか。¹⁰

結局、ヘミングウェイとマーセリンは、ダンス教室や学校でのダンスパーティーに出席をすることが許可されたわけであるが、父のエドは、自分の信念を曲げたわけではなかった。ダンス教室についても、妻のグレースと口論をしたようであるし、また、学校でのダンスパーティーも、グレースとエドの母である Adelaide Hemingway が、年ごろの娘、孫のために、彼に承知させたようである。

この出来事では、一見、父権制を尊ぶ妻と母が、主人のエドに許しを求めているような印象を受ける。しかし、妻の決定権の強さの証明は、その三年後にみられる。

ダンス教室の件から、三年後の大晦日に、ヘミングウェイ家では、大々的なダンスパーティーが催された。主催者は、グレースである。彼女は、息子と娘のためにと催したのであるが、81通にも及ぶインビテーションカードを作成し、家の入り口で、参加者にダンスプログラムを配布した。オーケストラが演奏を担当し、スクエアダンスにあわせて、peppy fox-trots や、古風な曲が演奏され、テーブルの上には、多くの料理が並べられた。¹¹

このパーティに、父エドがどのような印象を受けていたかは定かでないが、ダンスを嫌っていた父が、容易にその信念を変えるとは思われない。おそらく、このパーティに際してもなんらかの口論が夫婦間でなされたに違いない。しかし、最終的に催されたという事実は、いかに、グレースが家庭内で影響

力を持っていたか、あるいは、最終的な決定権を掌握していたかを暗に物語るものであろう。そしてさらに、注目すべきはその規模である。夫のダンス嫌いを知っているにもかかわらず、81通ものインビテーションカード、オーケストラの演奏と、あたかも、グレースは自分の家庭での影響力、決定権の強さを夫に見せつけんばかりである。

このように、グレースは、家庭内での決定権を握っていたと考えられる。そして、その決定権は、夫に自分の権力の強さを誇示するために、と同時に夫を辱めるためにも利用されていたようである。Kenneth S. Lynn は、家庭内でのエドとグレースを、以下のように述べている。

. . . there was the fact that he rarely won a dispute with Grace. In a way, this easily overwhelmed man was exactly the sort of husband she had wanted ; at the same time, she was disappointed in him—endlessly disappointed—and out of this feeling there often flowed, in the course of their many years together, contemptuous acts of reprisal, generally in the form of humiliations. To her family and friends, she pretended to be happily married . . .¹²

盛大なダンスパーティも、その参加者からみれば、家庭生活や夫婦生活の幸福さを示すものと捉えられたかもしれない。しかし、その背後には、グレースの夫に対する失意落胆と、その現われとしての夫への侮辱という側面があったのである。

「身を横たえて」にみられるような、夫のコレクションを独断で焼却し、勝ち誇ったように微笑む妻の姿は、その出来事が実際に起こったものであれ、ヘミングウェイのフィクションであれ、実際の家庭生活において、こどもである彼によって見受けられたものかもしれない。そしてこの母親支配のイメージは、ヘミングウェイにとって、家のイメージと結び付くことになる。

「身を横たえて」において、ニックは、母が地下室を整理する理由として、自分たち一家が引っ越しをするためとしている。そしてその新居とは、“designed

and built by my mother”(146)であった。引っ越しをすること自体ではなく、母によって建てられた新居へ移るという記憶が、母の支配的な姿を思い起こさせたということは、ニックにとって支配的ということが、多少なりとも、この母の家のイメージと結び付いていると考えられるであろう。それでは、作者であるヘミングウェイも、ニックと同様なイメージを持っているのであろうか。

この作品に登場する引っ越しと新居の記述は、実際に、ヘミングウェイ一家の歴史にも存在するものである。グレースとエドの新婚生活は、グレース方の家に住むことより始まった。グレースの父である、アーネスト・ホール(Ernest Hall)の妻、つまり、グレースの母が他界して以来、父が孤独な生活を送っていたことが理由であったらしい。そして、1905年、その父が他界し、娘のグレースと弟であるライセスター(Leicester Hall)には、父の遺産が残された。グレースは、その遺産をもとに、自分の夢であった近代設備の整った新居を建てることになる。その家は、“Eight bedrooms, a set of medical offices for her husband, and a huge music room for herself”と高尚なものであった。あらかじめ、そのプランを聞いたエドは、あまりの豪華さ、費用の大きさに反対したようであるが、結局グレースに説得され、建設することになる。しかし、グレースの、新居の建設理由である、こどもたちのためにより広い家をとということのほか、リンはこの家はまさに、“a monument to Grace’s ego”であると記している。¹³ しかし、ヘミングウェイが当時の新居について、それが母のエゴを満たすために建てられたことや、父がそれに反対をしたことを克明に記憶しているとは思われない。この新居と支配のイメージが結び付くには、さらにもうひとつのエピソードを彼が経験しなければならぬと思われる。

1919年に、グレースは、さらに自分のエゴを満たそうと試みる。Michigan湖の向こう側にある Longfield Farm(この農場は、1905年にヘミングウェイ一家が手にいれたものである。)に、自分の仕事部屋として、自分だけの家を建てたいというのである。この頃ともなると、ヘミングウェイの妹たちは大学へ入学する時期になっており、エドも、その資金のためにと儉約的な生活を望んでいたようである。しかし、以前の新居建設の場合と同様に、妻の思

う通りにさせたのであった。ヘミングウェイは、このグレース荘建設については反対であったようである。Carlos Baker は、そのヘミングウェイ自伝において、彼がどのように母を思っていたかを記している。ヘミングウェイは、グレース荘建設の後、グレース・クィンラン(Grace Quinlan)に、それを打ち明けた。

She (Grace Hall Hemingway) had “more or less hated” him (Ernest Hemingway) ever since he had opposed her using up two or three thousand “seeds” to build her studio, Grace Cottage, at Longfield Farm. The “jack” should have been used to send the younger kids to college. All families, he said airily, have skeletons in their closets, but the Hemingsteins have heaps.¹⁴

ヘミングウェイも、グレース荘建設当時は20歳で、自分の家庭で何が問題であるか理解できる年齢であった。その彼が、母自身のコテージ建設を問題と捉えていたということは、彼の言葉より理解できる。おそらく、自分の母親が、いかに乱費家で、夫の意思を無視し、自分勝手に生活しているかを感じたのであろう。そして、いかに家族を自分の思いのままに支配しているかに気付いたに違いない。

このように、ヘミングウェイにとって、支配する母のイメージは、家のイメージと結び付いていると考えられる。しかし、このエピソードから、ヘミングウェイの問題提示の仕方に対して、ある疑問が浮かび上がってくる。それは、なぜ、この支配的な母の問題を、家族全体のものとして捉えないのであろうかということである。彼の作品には家族全員を虐げる母の姿は描かれていない。自分も、グレース荘建設の費用は家族全員に負担をかけることになるということは知っていたにもかかわらずにである。なぜヘミングウェイは、この問題となる支配的な母を、父を虐げる人物としてのみ捉えているのであろうか。その理由は、おそらく、問題としている対象が自己の生き方にあるからであろう。つまり、問題としている支配的な母を、家族全体に影響

を与える存在というよりはむしろ、自己に影響を及ぼす存在として捉えているのである。

III

ヘミングウェイが、支配的な母の問題を自己の問題として捉えるためには、彼が父に自己を投影しなければならないと思われる。換言すれば、ある程度自分と同様な気質、境遇を持っていると父を捉え、その上で、父に欠如しているものを自己に吸収し、もし、それをすでに自己の内部に保持しているとすれば、それを再保証することである。支配する母と支配される父の問題も、ヘミングウェイ自身が父に自己投影をした結果生じるものなのである。

ヘミングウェイにとって、父への自己投影は、自己理想の対象として父を選択したことより始まると思われる。Pamela A. Boker は、著書において、ヘミングウェイが、いかに精神的に傷つきやすく、喪失、悲壮、感情的な痛みを回避する傾向を持っているかを述べ、それらの回避傾向は、自分の自己理想に執着していることより生じるとしている。¹⁵ そして、ヘミングウェイが自己理想形成のために選択した初期のモデルは、彼の父であると述べている。¹⁶ この意見に、わたしは賛同するものである。というのも、作品や彼自身の生活から、ヘミングウェイが、父を理想のモデルと捉えていたことは推測できるからである。

ヘミングウェイの作品にしばしば登場する、フィッシングやハンティングを通じての森での生活は、父より授けられたものである。父であるエドは、息子のヘミングウェイを、彼が旅行に耐えうると判断するやいなや、すぐにベア湖(Bear Lake)に連れていく。そこは自然にあふれ、“[i] t was an environment ideally suited to manly endeavours”であった。¹⁷ そして、3歳の時には、初めて父と釣をし、同行者の内で一番の大物を釣り上げたとき母グレースは記している。ペーカーは、父が彼に与えた自然の知識に関して、次のように記している。

The great gift of the doctor to his children was a knowledge

and love of nature. He taught Ernest how to build fires and cook in the open, how to use an ax to make a woodland shelter of hemlock boughs, how to tie wet and dry flies, how to make bullets in a mold that Anson had brought back from the Civil War, how to prepare birds and small animals for mounting, how to dress fish and fowl for the frying pan or the oven.¹⁸

「心が二つある大きな川」(“Big Two-Hearted River”)において、ニックが、自然の中でキャンプをする姿や、釣をして鱒との対決を楽しむ姿は、ヘミングウェイが、父から教授された自然での知識を持っていたからこそ生まれたものなのである。また、作品から離れ、ヘミングウェイ自身の生活をみても、ハンティングやフィッシングは、彼の人生からは、取り去ることのできないものであった。¹⁹ これらの、作品やヘミングウェイ自身の人生にみられる父からの影響は、彼が父を理想としていたことを暗に示すもののように思われる。では、なぜヘミングウェイは、この父から影響を受けたハンティングやフィッシングに執着するのであろうか。それは、これらの活動が彼にとって「男性」的生活を意味するものであり、ヘミングウェイ自身のアイデンティティ形成にとって欠くことのできないものであるからである。

ヘミングウェイが、「男性」的生活を嗜好する原因には、彼の生活環境が多分に関わってくると思われる。まず、彼の育ったシカゴ郊外のオーク・パーク(Oak Park)であるが、そこは、宗教的に厳格な地域であり、酒類の販売は1870年代より禁止され、ブルー・ロー(Blue law)によって、劇場、映画館は日曜日ごとに閉じられるといった場所であった。また、WASP中心のコミュニティであり、第一次大戦以前には、黒人の家族がその地域内に住むこともなく、また、ユダヤ人の流入を阻止する努力もなされていたようである。リンは、このオーク・パークを“a quite restrictive community”とヘミングウェイ自伝の中で評価している。²⁰ ヘミングウェイが、この生活空間に好意を持っていなかったことは、彼の飲酒嗜好や、またなによりも、彼がなんどもこの世界から逃れようとしたことから理解できる。²¹

ヘミングウェイの抱くオーク・パーク嫌悪の理由には、ある特有の性格をその共同体が有していたことが原因と考えられる。それは、Jackson J. Bensonの言葉を借用すれば、その場所が“the civilized-feminine environment”であったからである。²²

ベンソンは、「医師とその妻」にみられるような、医師が自分の感情を抑圧する姿勢を、彼がヴィクトリア時代的な規範と同化するためと説明し、その規範の説明として、善良な人間は口論をせず、また、感情的になり声を上げたりすることがないと同時に、敵意や怒りなどのあらゆる感情を表に出さないとしている。そして、その感情のはげ口として、その医師のハンティングやフィッシングに対する情熱を挙げ、彼が自分の住む世界から逃避するためにそれらを活用していると述べている。²³

ベンソンは、また、この医師にみられた状況をエドにも当てはまるとしたうえで、彼の住む世界においては、女性は智恵や権力を持つ存在として捉えられ、そして逆に、男性は、悪魔にも劣る存在へと降下させられていたことを記している。男性の存在は、“ineffectual and misguided child who must be always watched, frequently scolded, and in general directed away from the base natural tendencies of malehood”なのである。²⁴

ベンソンは、「医師とその妻」からエドの住む世界へと自己の論を展開しているので、直接には、この説明がオーク・パークであるとは断定できない。しかし、女性の地位が向上し、オーク・パーク社会において中心的な役割を担っていたことは事実である。特に、その地域での女性の台頭を説明するのは、婦人参政権運動である。オーク・パークでは、女性の選挙権を求める運動がはやくから行われており、1920年の憲法修正第十九条(the Nineteenth Amendment to the U.S. Constitution)の設立によって、国家レベルにおいて、婦人参政権が認められる八年も以前に、地域的な問題に関してであるが女性の参政権が認められていた。その獲得に際しては、オーク・パークの女性のみならず男性も参加して、スプリングフィールドのイリノイ州議会に嘆願し、州中をスピーチしてあるき、基金獲得のための夕食会やさらにパレードまで行った。²⁵

このように、オーク・パークにおいては、男性の運動よりも女性の運動の

方が中心であった。そのような社会で、ベンソンが述べたような男性の地位降下の風習があったとしても不思議なことではないであろう。そのような社会において、ヘミングウェイのような「男性」的な生き方を求める人間が、窮屈な生活を強いられたことは予測できる。ヘミングウェイのオーク・パークから離れたいという意思の裏には、個人的な社会反抗という側面があったのかもしれない。

ヘミングウェイに、「男性」的な生き方の必要性を感得させるには、オーク・パークのような女性向上、男性降下の風習のみが原因ではないように思われる。いまひとつの問題として、母親の影響が考えられる。そしてその影響は、オーク・パークのそれよりも、遙かに強く、彼の人生をゆるがすものである。

ヘミングウェイの幼児時代の写真の中に、姉のマーセリンと同じ衣服を身に付け、姉とままごとをして遊ぶヘミングウェイの姿が残っている。さらに、生後8ヵ月のヘミングウェイの写真では、長髪でドレスに身を包んでいる。²⁶ このヘミングウェイの姿は、母親の双生児嗜好に原因があると思われる。ベーカーは、このヘミングウェイの衣装を、母グレースの「空想を満足させるため」(“indulged her fancy for dressing Ernest and Marcelline alike”)とみなしているようであるが、彼女の双生児嗜好は、単なる空想を満たすのみで解決しないもののように思われる。²⁷ 姉のマーセリンは、小学校へ弟のアーネストと一緒に入学するために、幼稚園を留年しているし、小学校へ入学し、5年間ほど、弟と学年が異なる時もあったが、7学年、8学年時の間に、母のミュージックレッスンのために一年間学校を離れ、再び、弟と同じ学年になる。そして、二人が同じ学年である状態は、高校卒業まで続くことになる。つまり、母の双生児嗜好は、単なる空想ではなく、その現実化へと向かう傾向を持っていたのである。では、このような母の双生児嗜好が、ヘミングウェイにどのような影響を与えたのであろうか。

母グレースの、ヘミングウェイとマーセリンの双生児化は、服装の面でもみられた。リンは、グレースの二人の服装への関心を述べている。

In the early weeks of his life, Ernest's principal costume was a baby dress that had been “his Mama's,” Grace explained. At

five months, he was often seen in a “white lacey dress with Pink bows [and] light blue shoes . . . that Marcelline wore in her year old photograph,” and for a formal portrait in a photographic studio his mother dressed him in “the same dress Sister Marcelline at the same age had her picture taken in.” A month or so later, Grace began to buy two of everything—although not always in the same size—whenever she went shopping for children’s clothes.²⁸

このリンの言葉からもわかるように、ヘミングウェイは、幼年時代にしばしば、姉と同じ衣服を身に付けさせられていた。ここでは、生まれて間もない頃の衣服に関する記述であるが、グレースが記したヘミングウェイ3歳時の記述でも、二人が同じ衣服をまとい、双子の姉妹のようであることが解る。²⁹そして、この衣服や、母親の双生児嗜好に対する不満の念を、ヘミングウェイは幼いながら、母に漏らすことになる。

[W] hen he came to his mother shortly before Christmas 1902 and confessed to her that “he was quite fearful . . . as to whether Santa Claus would know he was a boy, because he wore just the same kind of clothes as [his] sister,” he revealed how uncertain he was that anyone believed him.³⁰

このヘミングウェイの母への不満は、彼の当時の悩みを明確に示していると思われる。つまり、彼の問題は、いかにして、自分が男性であることを人々に顕示するかであったのである。では、このヘミングウェイの悩みと母の双生児嗜好とは、どのように関連しあうのであろうか。

母親の双生児嗜好は、ヘミングウェイに大きな影響を与えたと思われる。双生児として育てるということは、母のグレースにとっては、同じ服を着用させ、同じ所で一緒に寝起きをさせ、同じ玩具で遊ばせるということであった。³¹ おそらく、ヘミングウェイは、自分と年齢も、また、体格や身体的構造

も違うマーセリンと、なぜ、双子のように母から扱われるのか不思議に思ったに違いない。そして、なによりも問題であったのは、自分が男性であることが無視され、なぜ姉と同じ服装をさせられなければならないかということであったと思われる。換言すれば、結局、ヘミングウェイにとっての問題は、いかに、男性である自己のアイデンティティを確立し、それを自分以外の人々に示すかであったのである。そして、その自己の確立に必要であったのは、男性である父を理想とし、父のようになることであったと考えられる。では、父のようになるとは、父を理想化するとは、具体的に、ヘミングウェイにとってなにを意味していたのであろうか。それが、彼の固執するハンティングやフィッシングを通じての森での生活であったのである。

この森での生活が、ヘミングウェイにとって「男性」的な生活を意味するのは、それがオーク・パークでの生活と対をなすものだからである。ハンティングやフィッシングを通じての森での生活が、ヘミングウェイにとって、どのような意義があるのか、ベンソンは以下のように説明する。

Hunting and fishing are continual symbols for the attempt of the Hemingway boy to identify himself with the father, attempts to return to the primitive family structure based on masculine authority and power which was destroyed by the Victorian-sentimental spiritualization of love, elevation of the woman to wisdom and authority, and reduction of the male to worse than the devil.³²

ヘミングウェイにとって、ハンティングやフィッシングは、オーク・パークの女性の地位向上による男性卑下の傾向によって破壊された、男性優位の原始生活への回帰を意味していたのである。実際に、ゲームの対象とされる動物についても、オーク・パークでは、避けるべきものであり、またそれを追いかける行為についても、人間の本性の中でも卑劣なものとして捉えられていた。³³ 「男性」的な生活を求めるヘミングウェイにとって、そのようにオーク・パークの人々にみなされている森でのフィッシングやハンティングは、理想

的なものであった。また、母親や他の人々に自分の「男性」らしさを示すには、それらの行為が最適であったに違いない。

そこで、父エドの存在である。彼は、幼少の頃より自然と親しみ、また、原始的な生活を行っていたインディアンたちとも交流があった。趣味は、自然の中での釣や狩猟や、獲物を材料にした料理である。このような父を、ヘミングウェイが自己理想の対象に選択したとしてもなんら不思議なことではない。このようにして、父エドは、ヘミングウェイにとって、自然の中で「男性」的な生活を営む、また、その知識に富む理想的な人物となったのである。

しかし、この理想的な父の像が、破壊される時が到来する。そして、その破壊の原因は、父が家庭に戻ったときであり、また、母と生活を共にした時に生じたのである。

IV

『ニック・アダムズ物語』に描かれているニックの父は、一見、自然と共に生き、息子をリードするような、ヘミングウェイにとってまさに「男性」的な人物のように思われる。しかし、作品各所に折り込まれた、ニックまたはヘミングウェイの父への失望感、父が永遠の理想像になり得なかったことを物語っている。³⁴ それでは、なぜヘミングウェイにとって、父エドが理想像に値する人物になりえなかったのであろうか。

ヘミングウェイと父との間の疎隔は、息子の思春期以後より始まると思われるが、ペーカールの思春期以後のヘミングウェイの活動に関する説明は、それを暗にほのめかしている。

After adolescence, he [Ernest] quickly abandoned the manual labor in which his father took so much pleasure, though he was always willing to expend equal energy in sundry forms of sport. He loved swimming, walking, and hiking throughout his life. . . . He shared his father's determination to do things "properly" (a favorite adverb in both their vocabularies),

whether building a fire, rigging a rod, baiting a hook, casting a fly, handling a gun, or roasting a duck or a haunch of venison.³⁵

ベーカーが、注目しているヘミングウェイと父に関する点は、いかに、ヘミングウェイが父の影響を受けているかということである。確かに、ハンティングやフィッシングなどの父から受け継いだ活動においては、彼の説明通りであろう。しかし、彼が見落としている部分は、なぜヘミングウェイが思春期以後の活動において、幼少時代に受け継いだ父からの影響に固執しているかということである。換言すれば、父から受け継いだ、ヘミングウェイにとって自己の益となりうるものが、なぜハンティングやフィッシングなどの活動のみであるかということである。実際に、それら以外の父が嗜好する活動（ベーカーの説明では、“manual labor”であるが）から、ヘミングウェイは退いている。このことから、ヘミングウェイは父を失望していたと判断することは、あまりに安直すぎると思われるが、彼の思春期以後の活動のうちで父から受け継いだものが、ハンティングやフィッシングなどしかみられないとすれば、少なくとも、ヘミングウェイが、父を自己理想としていた段階は、思春期より前で終りを迎えたと考えることができる。

リンは、ヘミングウェイの父への尊敬が薄れていった理由として、1911年に5番目の子どもであるキャロル(Carol)が誕生し、エドがヘミングウェイをウィンディミアへ連れていき、長く滞在することが難しくなったことや、森の中で二人の一緒に過ごす機会が減少したことを挙げているが、彼の最も重要視している理由は、母親の支配に従属するエドの姿である。

Far more significant, though, was Ernest's growing realization of his father's degrading subservience to Grace, for it resulted in a loss of respect, which was then intensified by Dr. Hemingway's abject departure from home in 1912 to take a "rest cure" for his nerves.³⁶

ヘミングウェイが、父への尊敬心を失ったときに、彼の理想的な父親像は破壊されたと考えられるが、その原因の一つには、母親に従属する父の姿があったのである。では、なぜこの従属的な父親が、ヘミングウェイの理想としての父親像を破壊させるに至ったのであろうか。

それは、彼の父によって幼年時代に作り上げられた、ヘミングウェイ自身の理想像、もしくは、「男性」であるというヘミングウェイなりのアイデンティティと関係があると思われる。父エドが、息子に伝授したのはハンティングやフィッシングなどの技術的な面のみではなかった。エドの自然での生活は、息子にとって「男性」らしい生き方、「男性」として抱くべき精神をも伝授したのである。ペーカーは、この父から息子へと伝授された精神的な価値観を次のように説明する。

To a remarkable degree, the child was father to the man : many traits of Ernest's boyish character held on with only slight modifications well into his adult life. "Afraid of nothing"—the maxim he had first uttered at the age of three—was an ideal of behavior in the face of adversity long after he had discovered that many things and events might legitimately arouse fear. All his life he sought scrupulously to uphold the code of physical courage and endurance which his father, and sometimes his mother, had early impressed upon him. The love of nature, of hunting and fishing, of the freedom to be found in the woods or on the water, stayed solidly with him to the end of his life.³⁷

彼の苦難への対処の仕方や、肉体的な勇気、忍耐などは、幼少の頃にヘミングウェイが、父より伝授されたものなのである。そして、ヘミングウェイを父から疎隔させた、父より伝授された精神とはペーカーの「水の上や、森での自由」(the freedom to be found in the woods or on the water)と関わりがある。

この「自由」は、作品中にもみられる。「心が二つある大きな川」において、

一人でキャンプをし、料理をし、釣をするニックの姿は、まさにこの「自由」を愛するヘミングウェイによって生みだされたものであろう。しかし、この「自由」という観念は、どこから生じるのであろうか。それは、その作品におけるニックの言葉から理解できる。

He felt he had everything behind, the need for thinking, the need to write, other needs. It was all back of him. (179)

ここより理解できることは、ニックにとっての自由とは、あらゆる必要性を置き去りにし、自分のためにのみ生きることを意味するということである。そこには、あらゆる必要性が生みだされる責任もなければ、他の人物に頼ることも、また頼られることもない、自分みでの力で、自分みのために生きることでできる世界なのである。換言すれば、「独立」的な生活を営むことのできる世界ということである。

ヘミングウェイにとって、「独立」的な生活を送るとは、「男性」的資質の一つと思われる。ヘミングウェイが、その「男性」的資質を形成する際の理想像は、父エドであった。以前も述べたように、オーク・パーク社会や母グレースへ自分の「男性」性を顕示するために、森でのハンティングやフィッシングを嗜好する父を、自己理想の対象として選択したのであった。その世界での父は、自分で得た獲物を料理し、自分でナイフを使い、枝を切り、キャンプをする場所をこしらえるなど、なにもものにも頼らずに自分の力と知識のみで生きていた。そのような父の姿から、「男性」的な独立精神を彼が学びとったことは、容易に予測できる。このようにして、ヘミングウェイは、自己の「男性」の理想像として、父の自然でのハンティングやフィッシングをする姿、そして、なにもものにも頼らずに生きる「男性」的独立精神、ベンソンの言葉を借りれば、“a masculine independence”を身に付けたのである。³⁸しかし、この「男性」的独立精神をゆるがす存在があった。母のグレースである。

家庭での母グレースは、夫に従属することを求めていた。このことは、以前にみたように、彼女が家庭での決定権を掌握していたことや夫を侮辱する

傾向があったことから理解できる。このように支配され、母に従属的な父は、ヘミングウェイにとって、もはや自然の中での「男性」的独立精神を示す存在でも「男性」的な理想となるべき存在でもなかった。その支配される、あるいは母に従属的であり、また依存的な父を、ヘミングウェイが母に「去勢」されたとみなしたとしても不思議ではない。³⁹ いままで、「男性」的な独立精神を保持しているとみなし、その父を自己理想の対象として選択したのであったが、家庭に入った父は、あまりにも母に従属的で、自然の世界で自分に見せたような「男性」的資質を保持しているとは思えないような存在であったのである。そのような父を、ヘミングウェイが、自己理想の対象として選択するはずはない。思春期以後のヘミングウェイと父との疎隔は、父の母による「去勢」化が原因なのである。

V

彼が、父を理想像の対象から除外させるに至った母の支配と「去勢」化の問題は、ヘミングウェイにとって重要な問題であった。なぜなら、男性である彼にとっても、その問題は直接関係するものであるからである。幼少の頃より、自己の「男性」性顕示の必要性を感得したヘミングウェイにとって、母の支配的な姿勢は、父の「男性」的資質を破壊するばかりでなく、自己の理想としての「男性」像をも破壊するものであったからである。そのことは、ヘミングウェイが、母を家族全体に影響を与える存在としてではなく、父に、換言すれば、幼年時代に理想像として選択した父に影響を与える存在として捉えていることから理解できる。そして、彼が学んだ支配され、従属的な父からの教訓は、「結婚」とは、「男性」的独立精神が剝奪され、妻に従属的な生活を強いられるものであるということであった。

では、実際に、ヘミングウェイはこの教訓を自己の生活において、どのように受け入れ、どのように対処したのであろうか。女性による支配を離れた「男性」的独立生活嗜好は、ヘミングウェイの作品や実生活にもみられるものである。そして、ヘミングウェイの従属的生活を強いられるという「結婚」観は、彼の「家庭」に対する価値観にも投影されているようにも思われる。

次回の論文においては、これらの点について考えてみたいと思う。

註

1. Ernest Hemingway, *The Nick Adams Stories*, ed. Philip Young (New York: Charles Scribner's Sons, 1972). 以後、本論に引用されるすべての短編はこの版によるものであり、引用箇所はページ数のみ記載する。
2. Ernest Hemingway, *Death in the Afternoon, The Complete Works of Ernest Hemingway*, introd. William F. Buckley Jr. (Norwalk, Connecticut: The Easton Press, 1990), p. 2.
3. いま一つの原因として、「失うことの恐怖」が考えられる。「異国にて」(“In Another Country”)において、少佐殿(Signor Maggiore)は、ニックにこのように言い聞かせる。

“He cannot marry. He cannot marry,” he said angrily. “If he is to lose everything, he should not place himself in a position to lose that. He should not place himself in a position to lose. He should find things he cannot lose.” (173)

これは、自分の妻を失った少佐が、ニックに、結婚するとは「失うこと」であるということを書いたものである。ヘミングウェイも同じ「結婚観」を持っていたようで、『午後の死』(*Death in the Afternoon*)において、

There is no lonelier man in death, except the suicide, than that man who has lived many years with a good wife and then outlived her. If two people love each other there can be no happy end to it. (122)

と述べている。このヘミングウェイの「死」観と結び付いたヘミングウェイの「結婚」観については、わたしはこれを二次的なもの、つまり「死」観より派生したものと考え、この論から除外した。本論で取り扱う「結婚」観は、彼の「男性」性顕示嗜好の原因となる、女性特に、両親不信と環境への反抗と関連したものであり、この「死」観より派生した「結婚」観は、ヘミングウェイが自分の「男性」性顕示の必要性を感得した後に形成されたものと考えられるからである。ヘミングウェイの「死」観につ

- いては、自己のアイデンティティ定義のために利用された価値観と考え、これを彼の「男性」性顕示の一兆候と捉えている。この自己のアイデンティティ確立、もしくは、自己定義のための「死」利用については、Alan Warren Friedmanの *Fictional Death & the Modernist Enterprise* (New York: Cambridge University Press, 1995) p. 175. 参照のこと。
4. Mark Spilka, *Hemingway's Quarrel with Androgyny* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1990), p. 128. このニックの母の他に、スピルカは、D. H. LawrenceのMrs. Morel, Thomas WolfeのEliza Gant, James Thurberのcartoon harridansを挙げている。
 5. Ibid., 128.
 6. 本論における、ヘミングウェイとその父や母に関する歴史的事実は、Carlos Baker, *Ernest Hemingway: A Life Story* (New York: Charles Scribner's Sons, 1969), Kenneth S. Lynn, *Hemingway* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1987), James R. Mellow, *Hemingway: A Life without Consequences* (Great Britain: Hodder and Stoughton, 1993)に依るところが大きいことを記しておく。
 7. 「身を横たえて」に描かれている、新居移転に際してのエピソードに関して、ペーカーは、その作品中の引用を用いて、事実とみなしている(Baker 7)参照。メロウは、Jeffrey Meyersの引用を用い、事実であることを疑ってはいるが、事実か否かの判断はしていない(Mellow 20)参照。また、リンもメロウ同様にその判断をさけている(Lynn 48)参照。
 8. Mellow 11.
 9. ペーカーに詳しい記述がある(Baker 9)参照。
 10. ヘミングウェイ自身はあまりダンスは、得意ではなかったようである。リンは、ヘミングウェイのダンスについて“his big feet and awkward coordination made him something of a menace on the dance floor” (Lynn 23)と記している。
 11. Lynn 23.
 12. Lynn 33.
 13. Lynn 18.
 14. Baker 73. ここに記されている、“Hemingstein”は、ヘミングウェイ自身が使っていた自分の呼称の一つである。
 15. Pamela A. Boker, “The Shaping of Hemingway's Art of Repressed Grief: Mother-Loss and Father-Hunger from *In Our Time* to *Winner Take Nothing*,” *The Grief Taboo in American Literature: Loss and Prolonged Adoles-*

cence in Twain, Melville, and Hemingway (New York: New York University Press, 1996) pp. 166-206. 参照。

16. Boker 174. ボーカーは、ヘミングウェイの理想の対象を父と祖父である Ernest Hall と捉えている。本論においては、父とヘミングウェイとの関係を中心に捉えるということで、祖父からの影響は除外した。しかし、この論の信憑性は、あきらかに祖父からの影響と思われる、兵隊の姿を真似て遊ぶ幼少時代のヘミングウェイから証明されるところと思われる。この兵隊の姿に関する詳述は、(Baker 5)参照。
17. Baker 3.
18. Baker 9.
19. ヘミングウェイがフィッシング、ハンティングを生涯嗜好し続けたことは、Key West やアフリカでの釣や狩猟などから理解できる。
20. Lynn 19.
21. リンは、ヘミングウェイがオーク・パークをどのように思っていたかを、次のように述べている。‘Whether or not Hemingway ever said that Oak Park was full of “wide lawns and narrow minds,” the wisecrack defined his position. For forty years, he insisted that he had always hated the place and that he had more than once run away from it.’ (Lynn 19).
22. Jackson J. Benson, *Hemingway: The Writer’s Art of Self-Defense* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1969) p. 9.
23. Benson 8-9.
24. Benson 9.
25. このオーク・パークにおける政治運動や婦人参政権運動について、リンにその詳述がある (Lynn 25-26)参照。
26. Anthony Burgess, *Ernest Hemingway and his world* (New York: Charles Scribner’s Sons, 1978) p. 10. 参照。
27. Baker 3.
28. Lynn 41.
29. リンの著書の中に、ヘミングウェイ三歳の頃について知ることができる、グレースの記述がある。‘Beside a photo of Ernest in a picture hat and ankle-length gown that was taken behind Grandfather Hall’s house in 1901, Grace wrote, “summer girl.” In an accompanying note to a series of group photos dated October 1902, she observed that “these groups [were] taken when Ursula [the third child] was six months old; Ernest Miller, 3 1/2 yrs; Marcelline, 4 3/4yrs. The two big children were then always dressed

alike, like two little girls.” (Lynn 41).

30. Lynn 45.
31. Lynn 41.
32. Benson 9.
33. Benson 9.
34. 作品中にみられる父へ向けられた失望感は、「三発の銃声」において雷を恐れるニックに、““. . .If there is a thunder storm get out into the open. Or get under a beech tree. They're never struck” (15)と雷の回避方法として間違った教えを与える姿や、「インディアン部落」において、““Do many men kill themselves, Daddy?”” (20)と息子に尋ねられても曖昧な返答しかできない姿から伺い知ることができる。
35. Baker 17.
36. Lynn 63.
37. Baker 16-17.
38. Benson 6. ベンソンは、ここで、ヘミングウェイの “a masculine independence”は、支配的な母と脆弱な父への反動として生じると述べている。
39. エドが、実際に、妻のグレースに依存的であったことは、金銭面などから理解できる。開業医のエドは、グレースと結婚生活を始めた当初、仕事を始めたにもかかわらず、患者はほとんど彼のオフィスへ来ることがなかった。その頃、グレースも自分の音楽教育を生かして、生徒を集めレッスンを行っていたが、それによって得る収入は、夫のそれを遥かに上まわるものであった。リンによると夫が、年収2000ドルであったにたいし彼女は、一月で、1000ドルの稼ぎがあったそうである。リンは、彼女を、“the principal breadwinner”と述べている(Lynn 33)参照。さらに、エドは、自分の学歴を伸ばすために、グレースより資金を提供されている。1908年に、グレースは、自分が夫の学歴を伸ばしてやらねばならないという考えもあって、夫をニュー・ヨーク産院へ勉強に行かせる。このことにより、エドは、オーク・パークにおける最初の産科学の専門家となり、オーク・パーク病院で産科学のチーフになっている(Mellow 20)参照。